OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ディスカッサント発言4 ： 韓国から
Author(s)	権, 赫泰
Citation	グローバル日本研究クラスター報告書. 2018, 1, p. 41-44
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68051
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ディスカッサント発言４：韓国から

権 赫 泰

はじめに

討論者は，文学研究者ではなく日本現代史の研究者なので，主に後者の立場から討論を進めたい。その過程において，ここ十年間に発表した討論者の原爆研究を参照することとする。まず，このワークショップの筋は，「‘原爆文学’を東アジアの観点から読みなおす」という表題にあらわれている。この表題を分解してみると，「原爆－文学」と「東アジア－観点」と「読む」という三つの要素で構成されている。これに，川口さんと金文柱さんが発表文で共通して言おうとする時空間，すなわち「北朝鮮による核危機」の時空間（これを広くとると朝鮮半島になり，狭くとると大邱や嶺南大学校になりうる）を加えると，問題はより複雑さを増してくる。「北朝鮮による核危機」という現時点の問題を思考の軸におくと，広島・長崎の経験にもかかわらず（あるいは，その悲劇のために？），アメリカ（1945 年）・ソ連（1949 年）・イギリス（1952 年）・フランス（1960 年）に続き，「アジア」に属する中国（1964 年）・インド（1974 年）・イスラエル（1979 年）・パキスタン（1998 年），そして北朝鮮がなぜ核武装に走ったのかといった問題を，また最近の問題に拡張すると，原子力の「平和的」利用という名のもとで，日本・韓国（脱原発？）・中国・台湾（今は脱原発？），そしてインドが，なぜ原発の建設と拡大の道を選んだのかといった問題を導き出すことができる。

①東アジアという観点の問題

「先行的」核武装国（NPT５カ国）の後に登場する後発の核武装国が「アジア」地域に集中しているという事実について考える時，これをアジア固有の問題として捉えるべきなのか，もしくは近代以降の矛盾がアジアに集中的にあらわれた結果として捉えるべきなのかという問題がある。もちろん，このような問いは，軍事的な安全保障の問題だけではなく，なぜ開発主義がアジアで集中的に体現されたのかという問題をも含む。「東アジア」という観点が意味するものは何であるか，それは冷戦による矛盾の集中的な表現なのか，あるいはヨーロッパの冷戦を条件づける熱戦という観点なのか（西欧の冷戦はアジアの熱戦を重要な条件とする）。または，東アジアを特定の価値空間として想定し，いわゆる原爆を生んだ近代文明とその文明から派生した「アジア」そのものを問題化しているものなのか。要するに，「（東）アジア」は価値なのか，地政学的あるいは戦略的なカテゴリーなのか。「（東）アジア」という観点を介入させると，原爆問題にこれまでとは違うどのような新しさが加

えられるのか。もしかすると，韓国と日本の非対称的な原爆観を問題視するために東アジアという観点が必要なのか。

②東アジア＋日本の問題

1964 年の中国の核実験ニュースに接して，「日本人としては残念なことであるが」，「内心ではよくやった。アングロサクソンとその手先（日本人を含む）の鼻を折ってくれて一種の感動」を感じたという竹内好とは違う観点から，核武装のアジアでの拡散という観点からこの問題を考えてみる必要がある。となると，やはり広島・長崎の経験が「〈戦後〉日本においてナショナル・アイデンティティを保証する集合的記憶として機能」（川口）していく過程と，その過程がヒロシマ・ナガサキを経て Hiroshima/Nagasaki といった形で「普遍化」（核武器 対 人間）していく過程が，結果的に「アジア」に共有できなかっただけではなく，その普遍化がアジア及び朝鮮人被爆者の排除を最も重要な構成要因としている問題について考えるべきである。要するに，日本の「戦後」の構造的な問題である。そして，そのような日本の「普遍化」過程が核兵器の特殊化，すなわち在来兵器との分離，さらには侵略と通常戦争との分離を通じて成り立ったことによって，広島・長崎の経験を「選民的な経験」（永井隆の言葉をかりると「神の摂理」）として位置づけさせ，責任の主体的な受容を非常に困難にしたということをも考慮すべきである。これと関連して，原子爆弾を投下したアメリカに向かうべき「民衆の恨み」を「神の摂理」という言葉でなぐさめるアメリカ側のデマゴギーに加担する言説であると批判した山田かんの指摘が思い浮かぶ。しかし，何よりも重要なのは，日本の「戦後」が広島・長崎の被爆経験があったにもかかわらず（あるいは，そのために），日米軍事同盟と核の傘の枠組のなかで作動したということである。この問題意識は，いわゆる核の傘の保護の外におかれた非同盟国や冷戦体制の解体のあとに核の傘から外された地域から「自主国防」の名の下で「後発」核武装が集中的に行われたことを理解するうえで非常に重要な意味をもつ。だとすると，（東）アジアというカテゴリーは，同盟体制の形成と変容，これに対する主権国家の対応という回路をつうじて接近できるのではないだろうか。

③原爆＋文学の問題

川口さんがいうように「原爆文学」という文学ジャンルは日本においては（原爆映画や原爆漫画にくらべると）相対的に確固たる地位を占める。ところで，金文柱さんの発表から分かるように，韓国においてはこのようなジャンル自体が存在しないと同時に原爆そのものをあつかった作品が非常に少ない。金文柱さんの批判的な紹介から分かるように，韓水山（ハンスサン）（特に『鳥』）を論外とすると，いわゆる韓国の原爆文学に含まれるのは高炯烈（コヒョンヨル）ぐらい（？）ということになる。このほかに，討論者の記憶している作品は，金源一（キムウォニル）の「あそこに至る長い道」（『作家世界』1992 年夏号。1995 年に同じ題名で単行本出版。後に，『広島の火花』〔文学と

知性社，2000 年〕というタイトルで改作のうえ再刊）程度である。範囲を映画まで広げても，「ジャズバー広島」（カン・グテク監督，ヨム・ジョンアとカン・ソクウ主演，1992 年）にとどまる。したがって，韓国の原爆文学というジャンルは，初めから存在しない。すると，金文柱さんの問題意識から，多くの被害者が存在するにもかかわらず，なぜ韓国では原爆が一つの文学ジャンルとして成立することはさて置き題材としても扱われなかったのかという問題を導きだすことができる。すなわち，数少ない原爆作品を分析するとともに，なぜ韓国では原爆が重要な文学ジャンルを形成することができなかったのかという問題（原爆文学の不在）を，なぜ日本では原爆文学が一つのジャンルとして定着したのかという問題と関連づけ，原爆文学というジャンルの形成史における比較研究の観点から考えてみる必要がある。おそらく韓国では広島・長崎の原爆を解放・光復の契機として受け入れる観点が強く作用したという歴史的経緯があるからであろう。討論者は，このような観点を過去のアメリカの「戦争早期終結論」を借りて「植民地早期解放論」と命名したい（拙稿「集団の記憶，個人の記憶」『現代思想』2003 年 8 月，青土社，参照）。

おわりに

韓国の原爆文学の不在についてもう一つ考えるべき問題は，「植民地早期解放論」のような観点があるにもかかわらず，日本の原爆文学（漫画を含む）が韓国にかなり紹介されているという事実である。たとえば，永井隆の『長崎の鐘』（1949 年，2011 年），井伏鱒二の『黒い雨』（1989 年，1999 年），大江健三郎の『ヒロシマノート』（1999 年，2012 年），中沢啓治の『はだしのゲン』（2000 年），宮崎駿の『風の谷のナウシカ』（2004 年），こうの史代の『夕凪の街 桜の国』（2005 年）などが，韓国に紹介された代表的な作品である（この他にはジョン・ハーシーの『ヒロシマ』〔1986 年，2015 年〕など）。しかし，このような翻訳出版が，韓国人被爆者への関心につながっていった痕跡はない。すなわち，被爆経験の「外部化」，あるいは分離の問題である（金文柱さんの発表で紹介されている高炯烈からは，この問題に変化が生じているようにみえる）。したがって，日本の原爆関連の作品の翻訳と受容およびその背景を分析し，受容過程における一種のバイアス問題も韓国の原爆観形成の問題として同時に検討する必要がある。たとえば，中沢啓治が初期作品で示したアメリカにたいする憎悪（人種的憎悪）が，なぜ『はだしのゲン』では消えたのか（拙稿「平和，人間，そして日本：「はだしのゲン」と「風の谷のナウシカ」」『当代批評』，2001 年春。「広島・長崎の記憶と唯一被爆国の言説」『日本批評』第 1 号，ソウル大学日本研究所，2009 年，参照）。金文柱さんの言葉をかりると，「憎悪の感情と復讐の行為」がなぜ「浪漫的な人間主義と普遍的な人間愛で解消」されているのかという問いである。また，こうの史代の『夕凪の街 桜の国』の翻訳においても，原作のもっている本質的な問題のほかにも，原題にある「桜の国」という表題がなぜ韓国語への翻訳過程において抜けたのか，「韓国の読者へ」という著者の文章の中に，「広島には連れてこられた韓国人が多く住んでいた」という文章が加えられたり「広島の原子爆弾は戦争を

早く終わらせるための決定」という文章が本の紹介文に挿入されたりしているのもバイアスの代表的な事例である（拙稿「〈排除の政治性〉と広島被爆の〈再記憶〉：こうの史代の『夕凪の街 桜の国』を中心に」『作家世界』21－3，2009 年 8 月）。